

I・HEAP (対象 : Allender, T., Clark, A., & Parkes, R. (Eds.). (2020). *Historical Thinking for History Teachers: A new approach to engaging students and developing historical consciousness*. Routledge.)

担当 : 空 健太 (国立教育政策研究所)
sora@nier.go.jp

アボリジナルの歴史と政治を教えるアプローチ

PART 4: KEY ISSUES IN AUSTRALIAN HISTORY TEACHING 21 Approaches to teaching Aboriginal history and politics

■ 著者 (2022/1/14 確認)

ハイディ・ノーマン (Heidi Norman)

- ・シドニー工科大学 社会・政治科学 教授
- ・アボリジナルの政治史の分野でオーストラリアを代表する研究者。
- ・専門分野は歴史学で、人類学、政治経済学、カルチュラル・スタディーズ、政治理論などの分野も活用している。
- ・研究内容は、NSW州のアボリジナルラグビーリーグトーナメントの歴史。ゴメロイの土地に関連する鉱業の社会的・経済的影響。都市におけるアボリジナルの生活の経済の長期的変化と関係についての研究など。



<https://profiles.uts.edu.au/Heidi.Norman>

■ 著書

<https://profiles.uts.edu.au/Heidi.Norman/publications> を参照。

■ 用語

- ・Aborigine, Aboriginal | 頻出するため、「アボリジナル」と表現
- ・contested histories | 論争の的となる歴史
- ・deep history | 深い歴史
- ・'black armband' | 「黒い喪章史観」
- ・'white blindfold' | 「白い目隠し史観」

概要と結論 :

この章では、オーストラリアの大学でアボリジナルの歴史と政治を教え、学ぶためのアプローチについての考察を行う。アボリジナルの生活に対する理解を深め、実践に役立ち、地域や国の歴史の「真実を語る」ことに貢献するアプローチや内容、評価について紹介し、歴史に対する共有意識を高める方法を提案している。

■ 議論の提案

1. 「歴史戦争」のような論争そのものもアボリジナルの歴史を学ぶ上で重要な点になっている。大学の選択科目だからできることか？中等教育段階までを含め、歴史をめぐる論争をカリキュラム上で取り上げる上で、配慮すべき事項はどのようなものがあるか？

■ 構成

INTRODUCTION
REFLECTION ON APPROACHES TO ENGAGING STUDENT LEARNERS
CONTENT: HISTORY, IDEAS AND CHANGE
ASSESSMENT: REFLECTIVE LEARNERS AND PUBLIC INTELLECTUALS
CONCLUSION

1. はじめに

- 本章の目的＝オーストラリアの大学でアボリジナルの歴史と政治を教えるアプローチについて考察。
取り上げたアプローチは、アボリジナルの生活に対する理解を深め、実践に役立て、地域や国の歴史の「真実を語る」ことに貢献する。
 - なぜアボリジナルか？（アボリジナルをめぐる課題）
 - ・アボリジナルにとっては、オーストラリアの人々に過去の出来事が真の意味で理解されていないという悲しみが続いている。
 - ここ半世紀の間のアボリジナルの歴史をめぐる変化
 - ・不快な「沈黙」（Stanner 1969）あるいは「忘れ去られた」歴史
↓
 - ・学術的・活動的・創造的な作品の驚異的な急成長により、国家の社会的正義の主張を支え、受け入れられてきた歴史記述に疑問を投げかけ、国の物語を再構築してきた。
 - ・1980年代後半からアボリジナルの歴史を教えることが義務化
- アボリジナルの世界と経験が、国家の歴史をめぐる論争の中心になっている。

平和的な入植と成功を収めた戦士たちという入植者の物語

→アボリジナルの物語が「陽気な物語に長くて暗い影を落としている」（Reynolds 2006）

2. 学習者を惹きつけるアプローチについての考察

- 学生に学問的知識・批判的な分析・コミュニケーション・専門能力などの資質を身に付けるために、学習をどのように促進するかが課題。
→筆者が用いたアボリジナルの政治史を教えるアプローチ
＝アボリジナルの世界と、入植者の制度・考え・行動との接触領域について、時間と空間で理解するためのアプローチを組み立てること（学際的なアプローチ）
 - 論争的となる歴史は学生にとって特別な学習課題。変革の効果的な担い手になるために重要。
 - 学習上の課題
 - ①学校の歴史に対する不満
 - ②不安・不快感
- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| ほとんどの生徒は、学校で教えられたアボリジナルの歴史に失望している。また、急進的な立場をとるために、学問的な学習の複雑さやニュアンスを拒否する生徒もいる。 | 声に出してアボリジナルの歴史について議論することに不安を感じている。彼らは、不快感を与えることを恐れ、自分の意見がどれほど深く信じられていても、それが検証されないことを自覚している。 |
|-------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
- ③学生の職業や専門分野も多様。

- そのため、学習者を惹きつけるアプローチが必要。

要件 知的な厳密さを維持しながら、同時に学生を惹きつけるものでなければならない。既存の議論や中核的な学習へのアクセスを提供するだけでなく、学生が自分自身の興味を探求することを可能にし、そして何よりも、優しさと配慮を可能にするものでなければならない。

3. 内容：歴史、考え、変化

選択科目「アボリジナルの政治史：考え、行動、エージェンシー（Aboriginal Political History: Ideas, Action and Agency）」の学習とカリキュラムへのアプローチ

学習の導入部

<https://www.youtube.com/watch?v=1n6VJ5jq7zY>

- ・First Footprints（最初のオーストラリア人の物語）を視聴。
- ・ドキュメンタリーに関する問いに答える。
- ・近隣の地域へのフィールドトリップや、現地の訪問などを行う。

活動 学生は、オーストラリアの5万年の歴史と、深い過去の歴史的な物語を作るために必要とされる

分野や方法について考えるよう求められる。また、自分たちが住んでいる国や元々住んでいた人々や現在も続いている場所との関係について、どのようにして知っているのかを考えるように促される。

ねらい 自分自身の経験や見解、それらがより広い文脈の中でどこに位置しているのかを認識する。

このプロセスは「深い歴史」(McGrath & Jebb 2015)

- ・人間の経験の全範囲を探ろうとする。
- ・歴史家リネット・ラッセル(Lynette Russell) (2017年)が「到着から、気候、技術、信念体系の変化、マカッサン、ポルトガル、オランダ、フランス、そして最後にイギリスとの交流まで」と要約しているように、「生まれ、育ち、維持されてきた2500世代に及ぶ人々、つまり風景を変え、狩りをし、歌を歌い、宗教を実践し、死者を埋葬してきた人々」を対象とする。

(通常の学習では)アボリジナルの歴史は、オーストラリアの歴史の裏側。苦境に立たされたり、黙殺され、国家や植民地権力、英国人と先住民の関係に巻き込まれる。

テーマ1 「アボリジナルの歴史・考え・変化の戦場」

3週間かけて、以下を探究する

- ・オーストラリアにおけるアボリジナルの歴史の誕生の中心となった問題や議論
- ・より広範な国際的な運動の影響
- ・植民地化と収奪を理解する上で重要となる思想、貿易、土地や資源へのアクセス

ねらい 私たちが過去をどのように解釈し、現在をどのように理解するかについて、より幅広い議論を呼び起こす。

活動例 「忘却の流行 (the cult of forgetfulness)」に疑問を投げかける分野の学者を考察。

- ・侵略が時と場所によって様々な形をとったことや、植民者と被植民者の複雑な関係について考察する。
- ・歴史学に関する議論や、革新的な手法によって辺境に関するさまざまな記述がどのように生み出されてきたかを学ぶことで、過去がどのように語られてきたかを把握する。

効果的な議論を導いた例

シドニーのデイリー・テレグラフ紙が一面トップで報じた、ニューサウスウェールズ大学の言語ガイド、とりわけ、スタッフや学生が「発見 (discovery)」の代わりに「侵略 (invasion)」という言葉を使うことを推奨しているもの、を非難する記事(The Daily Telegraph 2016)。学生たちは、フロンティア、そして植民地時代の暴力や収奪について記述することが、なぜオーストラリアではこれほどまでに困難なことなのかを考えるよう求められる。

「植民地時代のフロンティアの平和的開拓」という支配的なナラティブ



「植民地時代の入植者とアボリジナルとの暴力的な対立」

テーマ2 20世紀初頭からニューサウスウェールズ州のアボリジナルの生活を支配するようになった行政体制の出現に影響を与えた考え方を考察する。

概要 権威主義的な支配に抵抗するためにアボリジナルが展開した様々な戦略と、その時々への支援者について学習する。国際的な連帯運動やアボリジナルの近代化とともに、人種科学がこれらの行政体制をどのように形成したかを考察する。

テーマ3 脱植民地化、フェミニズム、環境正義、反人種主義など、より広範な社会運動を参照しながら、変化がどのように起こるかを考察する。

概要

- ・植民地国家に対する文化的背景に基づいた主張として土地の権利が浮上し、場所に根ざした国とつながっているというアイデンティティの主張とともに、汎アボリジナルの国民政治運動が登場したことを学習する。
- ・また、1970年代からのアボリジナルの政治の出現と、最終的な政府の対応について、ローカル、ナ

ショナル、インターナショナルの視点から影響を考察する。

- ・この時代に制作された多くの作品に見られる、アボリジナルの歴史への関わり方の例を学ぶ。これらの作品は、権力を再交渉し、アイデンティティと未来を再構築しようとするものだった。

カリキュラムにおける重要な考慮点＝国家に対するアボリジナルの社会的正義の主張を、脱植民地化を阻害する権力や要因（より構造的なもの）のより広い文脈の中で組み立てる。

啓蒙に向かって前進しているとか、アボリジナルの生活機会が継続的に改善されているといったストーリーを語るのではなく、1996年からのアボリジナルをめぐる歴史の論争に触れることで、変化が一直線に起こることは滅多にないということを学生は気付いていく。

- ・1990年代以降の「歴史戦争」

1996年の保守的な政権（アボリジナルの権利を認めようとしない）の誕生と「喪章史観」への批判

<p>ブレイニー：アボリジナルの生活に重点を置いた新歴史は、オーストラリアの歴史を修正し、過度に悲しむことによって支えられている。つまり、過去のオーストラリアは、修正主義者が認めているよりも公平な社会であったこと、アボリジナルの人口減少は、大量殺戮による暴力よりも病気によるものである。</p>	<p>ウィンドシュトル『アボリジナルの歴史の捏造（The Fabrication of Aboriginal History）』（2002年） 歴史家がアボリジナルの人々の虐殺の証拠を捏造した、つまり辺境での暴力の証拠を捏造した。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

- ・ヨルタヨルタ族の先住権原（native title）をめぐる判決（否定的な判決）

→ 一次資料の限定的な使用や、アボリジナルを傷つける出来事

- 学生にとっては、過去の出来事に対するアボリジナルの視点がどのように否定されているかを学び、その過程の影響を考えることは、困難かもしれないが、不可欠である。
- アボリジナルの歴史を学ぶことで、個人が学問の伝統、過去の分析、権力の理解について教育を受け、それによって変革の担い手となることができる。

4. アセスメント：反省的な学習者と公の知識人

- 学生が知識人として将来の専門家として、アボリジナルの世界に積極的に関わることを重視
それを達成するための様々な活動（フィールドトリップ、ケーススタディのロールプレイ、教室でのディベートなど）

- 「アボリジナルの政治史」の科目での2つの評価活動

	例1	例2
評価活動	学生は自分がアボリジナルの社会的・政治的領域における公共的な知識人であることを想像し、アボリジナルの政治や歴史の分野で最近出版された本や創作物のレビューを行う。	学生は自分で行ったシドニーでの視察について、振り返りのブログを書く
ねらい	建設的で情報に基づいた方法で議論に参加し、変化のためのエージェントとなる責任があることを理解させる。	学生が教室の外に出て、場所、所属、時間の経過による変化についての考えを応用できるようにする。
その他	学生はレビューを書き、それが掲載される可能性のある自分の専門分野の出版物を推薦することが要求される。	シドニーの見方や経験が変わることが期待される。（この活動を経て）学生は、シドニーは常に深い歴史を持つ「アボリジナルの場所」とであると捉えている。

5. 結論

- 歴史の真実や過去の事実、価値、解釈をめぐる歴史家の議論は、知的なやりとりに留まるものではなく、私たちの人生、コミュニティ、そして国の物語である。つまり、これらの物語は、私たちが周囲の世界を理解するための枠組みを形成し、共有のアイデンティティを想像するための感情を呼び起こすものである。
- 学問としてのアボリジナルの歴史は、オーストラリアの大学では不安定で周縁的かもしれないが、文化的な能力を高めることができる分野の一つ。
- ただし、「歴史家が過去についての真実を客観的に立証できる」と宣言することには注意が必要
「自らの発見が科学的というだけでなく、客観的な地位を獲得したという主張には、常に疑問符が付いていなければならない」（Curthoys & Docker, 2010）
=歴史の中に真実を見出すことの必要性と困難さ。これに応えていくことが大学の役割
- 多くの声明には、古代の主権者を受け入れることにより、オーストラリアの国家性が豊かになるかもしれないという希望が含まれている。

*参考引用文献は原文を参照